

# 特集

## 特養解体、小規模施設に分散 入所者を元の場所に戻す―新潟・長岡

角田彩乃  
新潟支局

社会福祉法人長岡福祉協会「高齢者総合ケアセンターこぶし園」(新潟県長岡市)が、市郊外にある大規模な特別養護老人ホームを解体し、中心部に位置する5カ所の小規模施設に入所者を移転させる取り組みを進めている。来年3月、最後まで残っていた30人が住み慣れた場所に新しくオープンする施設に移転し、8年がかりの事業はようやく終わりを迎える。小山剛施設長(58)は「施設に『避難』していた人たちが、ようやく元の場所ですらされるようになる」と感慨を込めて語る。長岡市は「市が推進する地域密着型サービスについて密接に協力していただいている」と評価した。

### 住宅地に溶け込む「施設」

移転先の一つ、「サポートセンター撰田屋」(以下、撰田屋)に向かった。2010年7月、特養から20人が引越してきた場所だ。撰田屋は、①地域密着型小規模老人福祉施設②小規模多機能型居宅介護③認知症対応型共同生活介護――のサービスを備え、在宅支援型住宅、3食365日の配食サービスも提供している。

撰田屋は住宅地に溶け込んでいた。生け垣はなく、周囲の民家と屋根の高さは同じ。玄関先はカフェテリアかと見まがう。室内に足を踏み入れる

と、共有空間の「カフェテラス・キッズルーム」が広がる。おしゃれなインテリアを施したカウンスターが置かれ、昼食を取るスタッフの姿があった。ワイングラスやシャンパングラスが並び、まるで喫茶店兼バーだ。

絵本やおもちゃが置かれたキッズルームには、近所の男児2人が遊びに来ていた。この部屋を小山施設長は「屋根のない公園」と呼ぶ。入所者、スタッフ、地域住民の誰もが行き来できる場所であり、「施設」ではなく「家」という強烈なアピールだった。

「カフェテラス・キッズルーム」とつながる老

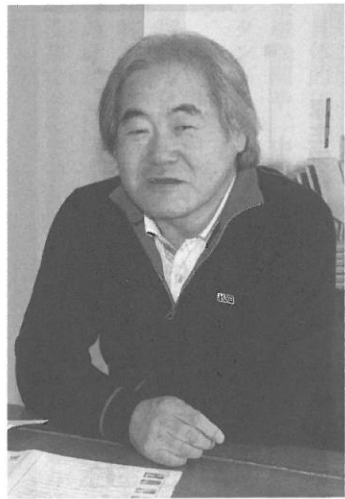


サポートセンター撰田屋の「カフェテラス・キッズルーム」

きる仕組みになっている。「建物の周囲に柵があり、自分の部屋から自由に出て行けないのは、管理する側の都合。社会で生きようとすれば、けがをすることもある」(小山施設長)と、あくまでも個人の自由を尊重している。

### 特区申請で実現、全国への先駆けに

特養の解体は、国の構造改革特区として2005年3月に認定されて始まった。長年、小山施設長が構想を温め、長岡市に提案して実現。計画には、「既存の特別養護老人ホームの機能を地域に分散し、本体施設と密接に連携をとりながら新たなサテライト型居住施設を整備する必要がある」と記載された。第1弾となった「サポートセンター美沢」(以下、美沢)は06年3月に完成。この仕組みは介護保険法改正により06年度、地域密着型サービスとして創設され、こぶし園は全国



こぶし園の小山剛総合施設長

小山施設長はこぶし園がつくられた1982年、泣きながら施設に来た4人の高齢女性の姿を今でも覚えている。「介護の仕事は30年やっていると自分で『入りたい』というおじいちゃん、おばあちゃんは一人もいない」という。介護施設は、入所する高齢者ではなく、彼らを支えられない家族のために必要なもの。30代で両親を介護し、それを身をもって知ることになる。「在宅介護」体力もあり介護の知識もある自分がやっても、交代要員がいなくてダメだった」と苦い経験を語る。

### 「介護を一人称で語る」

こぶし園は、24時間365日のケアを掲げる。05年の制度改正で、施設入所者と在宅で生活する人との費用負担の差を是正しようと、施設の居住費と食費が原則自己負担となった。これにより、「高齢者が施設にいる理由はなくなった。高齢者が『アパート』において、私たちが介護すればいい」という発想。1日3食と24時間看られる仕組みがあれば、在宅で過ごせる」(小山施設長)と思える。

自前の物件にもこだわらない。こぶし園が運営

する各サポートセンターなど市内16カ所の施設のうち、所有しているのはわずか数カ所。土地や建物はこちらもリースで、運営のみこぶし園が担っているケースも多い。美沢のオーナーは、実は農家だ。施設の設置がうまく進む理由は「社会が私たちの仕事を知っていて、社会的信用があるから」(同)だという。

一方で、まだまだ認知度は高くない。約18万人が住む旧長岡市地域に点在するサポートセンターは「明日の高齢者」が来る施設。誰もが使えるようにしないといけない」(小山施設長)と言うが、地域で施設が存在を知らない人もいる。撰田屋の責任者である上村三郎業務課長(48)は「大人は『施設』に抵抗があるのかもしれない。本当は誰も入りたくないのだから、入らないといけないときが来るかもしれない。そんなときのために地域の人たちに知ってもらいたい」と話す。

けれども、撰田屋で子どもたちは自分の部屋にいるようにくつろいでいた。上村氏は「子どもは弱っているお年寄りに自然と優しくなる。学んでいっている」とも実感している。いつかこの子どもたちも、施設を必要とするときが来るかもしれない。小山施設長は「介護を一人称で語らないといけない。決して人ごとではない」と繰り返し訴える。「何もしない方が楽かもしれないが、人の暮らしは本来非効率。介護を自分のこととして、高齢者の普通の暮らし、地域での生活を支えていきたい」と語った。